京都広告協会70周年記念事業
これからの30年 メッセージ募集

最優秀賞

西村純子 「30年後のいってくるね ～ほんもの教育～」

「いってくるね」と、にこやかな笑顔で月に一度、滋賀から四条通りへ出掛けて行った亡き祖母。長年法衣仕立てをしていた祖母は、デパートで流行や本物を眺め、お気に入りの生地屋さんで布の手触りや時代の空気を感じていた。歩き疲れたらお茶屋で一服し、美味しいお菓子を買って帰る。祖母にとって京都は、五感を研ぎ澄まし、美意識を高める「生涯の学びの場」であり、何より心から愛する街だった。

現在京都の観光地は、あふれんばかりの観光客で賑わう。京都は、観光のあり方や伝統産業の継承といった課題を抱えている。一過性の観光地として消費されるのではなく、次の30年、この街の伝統をどう未来へと繋ぐべきだろうか？

私が考える30年後の姿、それは「商工業と教育が手を携え、子ども達の日常の中で文化と実体験を育む循環の仕組みが根付いた街」だ。単発のイベントではなく、学びに「京都の本物」を取り入れてほしい。例えば割れて売り物にならない、清水焼の欠片を小学校に寄付してもらう。それを子ども達と何に使えるか考えて、新しいアートを創る。また、レンタルで役目を終えた子ども着物を幼児教育の現場でごっこ遊びの衣装として使ってもらう。学校で京野菜を種から育てる。できた野菜はどうやって食べるかアイデアをだしあって、調理する。そうした、日常の中で当たり前に京都に触れこれらを「どうしていく？」と自ら考える教育が、京都を愛する心を育むのではないか？そのために、職人やアーティストが住む町屋や施設を整え、プロが子ども達と出会う、関わる仕組みを作りたい。また京都とゆかりのシニア層、地域の方を学校レンジャーとして招き、子ども達の得意な事を伸ばし、心に寄り添ってもらうのはどうか？

祖母が教えてくれたのは、京都の文化とは日常の中で触れ、自分を高めていくものだということだ。30年後、京都で育つ子ども達が本物に囲まれて、創造性を咲かせている未来を心から願っている。